

天使たちの課外活動

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

1

リイは約束の時間を気にして急いで歩いてきた。

サフノスク大学の構内は広い。季節の花の花壇や、芝生の丘や、木立の間を通り抜ける小径もある。

通い慣れた小径を早足で進み、短い階段を上って待ち合わせ場所の食堂に出ようとした時だ。

何か小さなものが階段の上から転がり落ちてきて、こつんと靴に当たって止まった。

小石ではない。人工的な光を放っているものだ。

鈍い金色に光る小指の先くらいの大ささの球で、紐を通す穴が開いている。女の子がアクセサリに使う硝子玉のようだが、それにしても渋い趣味だ。

拾い上げてみると、小さいのにずっしりと重い。金属の球のようだった。

つるとなめらかな部分と細かい文様がびっしり刻まれた部分が複雑に入り組んでいる、手の込んだ細工が施してある。

これはただの玩具ではない。落とした人が探しているはずだった。落とし物として届けようと思いい、球を持つて階段を上ると、まさに地面に四つ這いになつている人がいた。

砂利道に直に手をついては痛いだろうに、茂みの下を覗き込んでいる。そのせいで顔は見えないが、真つ白な長い髪が地面にばらりと広がっている。

シエラの銀色の髪とはまた違う白髪だ。老人かと思いきや、体格は若い男性のものである。

「これを探してるの？」

声を掛けると、その男の人はぱつと立ち上がって、こちらを見た。

リイは顔色一つ変えなかつたが、他の当たり前の少年だったら後ずさりしていたかもしれない。

四つ這いから一瞬で立ち上がった動作の唐突さも

さることながら、振り返った人の風体があまりにも変わっていったからだ。

背の高い人だった。細身ながら鋼はがねのような印象を与える身体つきだ。腰まで流れる髪は真っ白なのに、肌は浅黒く、その顔にもむき出しの腕にも、開けた胸元にも複雑な刺青しせいが彫り込まれている。

瞳ひとみは本当なら灰色の部類に入るが、妙に金属的な輝きで、まるで水銀のような印象を与えている。

服装もかなり独特だった。そろそろ寒くなるのに、原色の布を身体に巻き付けただけのように見えるし、足元も裸足はだしで草履ぞうりを履はいている。

大人でも初めて見たら圧倒おさされそうな人だったが、リイはびくともしなかつた。むしろきれいな人だと思いが言つた。

「はい」

金属の球を摘つまんで差し出しても、その人はなぜか受け取ろうとしなかつた。掌てのひらを合わせて軽く頭を下げるといふ丁寧な謝意を示して言つた。

「地面にお願いする」

「えっ？」

落とし物を差し出しているのに受け取ろうとせず、わざわざ地面に置いてくれと言ふ。

リイが面食らつたのも当然だが、その人は張りのある豊かな声で淡々と続けた。

「非礼と思われたらご容赦ようしゃ願ねがひたい。戒律によつて女体にょたいに触れることは禁止されているのだ」

連邦大学には共和宇宙中から生徒が集まっている。中には中央圏から遠く離れた辺境からやつて来て独自の掟おきてや習慣を守る人もいる。

そのほとんどが宗教絡がらみだから、この人も何らかの宗教を信仰しているのだろう。

顔や腕の刺青も単なる装飾でしては、宗教的意味合いの強いものと考えれば納得がいくが、落とし物を受け取る時に、掌てのひらに女性の指が触れてもいけないとは徹底している。

女の子と間違えられてもリイは怒らなかつた。



変に纏わすにはつきりと言うこの相手に好印象を持つたくらいだった。微笑を浮かべて、空いた手で自分を指さした。

「大丈夫。これは立派な男体だから」

相手は眼を丸くしてリイを見つめた。

この男性ほどではないが、長く伸ばした金の髪は眩しく煌めき、深い緑の瞳は寶石と見紛うばかり、なめらかな頬はいきいきと血の通う大理石のよう、唇は薔薇の花びらのようと来ている。

少女にもない匂やかさであり、抜群の美貌だ。

この華麗としか言葉の見つからない容姿を『立派な男体』と表されたのでは困惑しても無理はないが、その人は再び白髪のを下げて、両手で碗のような形をつくって差し伸ばしてきた。

「かたじけない」

「どういたしまして」

わざわざ両手で小さな球を受け取るのも変わっているが、リイは手の中に金属の球を入れてやると、

急いで食堂に向かった。

ルウとシエラはもう来ていた。

今日はここで昼食を食べる約束だったのである。

「遅かったね」

「悪い。出るのが遅くなって」

中学生と大学生ではなかなか顔を合わせる機会がないので、三人はよくこうして食事を取っている。

この三人が揃うと目立つこと夥しい。

大学生の中に中学生が二人混ざっているだけでも注目の的なのに、リイが黄金の薔薇なら、シエラはさながら銀の百合である。少女にもない雪白の肌は陶磁器のようで、瞳は上質の紫水晶のようだ。

ルウは二人に比べて輝きでは劣るかもしれないが、黒い真珠のような艶やかさと謎めいた美しさは逆に二人にはないものだ。

この一年でサフノスクの学生たちもだいぶ慣れたはずだが、新入生にとってはまだまだ衝撃のようで、男女を問わず、ぽかんと口を開けて見入っている。

リイとシエラは今学期の頭に進級して、中等部の二年生になった。

二人とも去年に比べて背も伸びたし、リイは髪も少し長くなった（面倒くさがって切らないからだ）。

それはいいのだが、無造作に洗いっぱなしの髪をこれまた無造作に手櫛でまとめあげるだけなので、シエラはいつもはらはらしているらしい。

話を聞いたルウが笑いながら言ったものだ。

「中学生くらいの女の子だと、ものすごく髪の毛に気を使うのにねえ」

「おっしゃるとおりです。『普通に洗ってそれ!』』ということで、この人は女生徒という女生徒を敵に回しますよ」

当のリイが驚いて眼を丸くする。

「なんでおれが頭の洗い方で女の子に恨まれなきゃならないんだ?」

「女性の皆さんは美容にたいへん神経質なんですよ。もちろん髪にもです。——各種トリートメントやら

泥パックやら蜂蜜やら。わたしですら、『髪に何か塗ってるの?』と訊かれたくらいですから」

「頭に蜂蜜なんか塗ってどうするんだよ。べたべたしてかなわないだろうに」

「その分、髪に艶が出るですよ。——女性陣がそこまで苦労しているというのに、あなたは『店で売ってる一番安いシャンプー』と言うんですから」

ルウがぐすくす笑っている。

「なるほどね。それでこんなにきらつきらの金髪? 女の子たちが眉を吊り上げるのもわかるよ」

「いえ、吊り上げるよりは既に諦めの境地のようで、皆さん、ため息を吐いてます」

「けどさ、そう言うシエラはどうなの。お手入れは何かしてるの?」

「はい。少女たちに聞いて一通りは試しました」

リイがまた眼を見張る。

「試したのか?」

「美容関係はわたしにとっては重要な課題ですから。

彼女たちと仲良くするためにも話題になった商品は使ってみることにしてゐるんです」

ルウが興味を示して身を乗り出した。

「どうだった。何かいいのあった？」

「いえ、それが……どれも似たり寄ったりでした。

もともと中学生のお小遣いでは高価な品物には手が届きませんけど……」

「でも、ああいうのって高級ならいいってものでもないでしょう」

「そうなんですよね。髪や肌に合う合わないという問題もありますから」

「下手へたなの使うと髪がきしきしになるもんねえ」

「そうなんですよ。——そちらはいかがです。何かおすすめはありますか？」

「今使ってるのは、うちの自然科学部がつくってる香草から抽出した成分を使ったやつ。結構いいよ。草っぱいって言う子もいるけど、ぼくは好きだな」

「ここの売店で売っているんでしょうか」

「そんなにたくさんはつくれないんだよ。興味あるなら分けてあげようか」

「はい。お願いします」

自分にはついていけない話題にリイは苦笑して、首元にかかる金髪の一房を捻ひねった。

「それじゃあ、女の子に恨まれないようにこの髪はもうちよつとくしゃくしゃにしとくか」

シエラが笑いながらもきつぱりと言った。

「いえ、それはわたしの精神衛生上ぜひとめやめていただきたいですね。人前でも構わず結い直したくなりますから」

リイの洗髪に関しても言いたいことがあるようで、シエラは残念そうに銀の頭を振っている。

「あなたはどうも洗いが雑でいけません。いつそわたしが洗って差し上げたくなりますが、それも生徒同士では行き過ぎた行為なんでしょうね」

ルウが呆あきれて笑っている。

「まずいよ。浴室は個室の中なんだから」

「そうだぞ。子どもでもあるまいし。おれは自分の身だしなみくらいちゃんとやってる」

「あなたの『ちゃんと』は信用できないんですよ。」

汚れてはいないというだけでしょうが」

磨けばもつと光るものを——と、シエラは悔しく思っているらしいが、リイは真面目に言い返した。

「ただでさえ女の子の間違えられるのに、これ以上磨いたらますます面倒なことになる」

ルウはひとしきり笑って、唐突に言い出した。

「二人とも二年生になったし、そろそろ学生らしいことを何か始めてみたら？」

リイは首を傾げた。

シエラも不思議そうな顔になった。

リイもシエラもアイクライン校中等部の二年生で、月曜から金曜まで学校に通って勉強している。

十分、学生らしい生活をしている自信があるが、ルウはデザートに手を伸ばしながら話を続けた。

「十四歳になったら課外活動を始められるんだよ」

「部活動や同好会のことですか？」

二人とも決まった部には所属していない。

入学した当時は何しろ目立つ新入生だったので、

ありとあらゆる部活動の先輩たちから熱心に勧誘されたものだが、連邦大学は何よりも個人の意思が尊重される教育機関だ。無理やり承諾させられた入部など認められるはずもない。

上級生もそれをわかっているから強要にならない程度に加減して（ただし断りにくい雰囲気濃厚に醸し出しながら）その気にさせるように勧誘するという離れ業を駆使してくるのだが、そこまでしても狙った生徒を獲得できるとは限らない。

リイとシエラもしつこい入部の誘いをねばり強く断り続け、一年以上が過ぎた今ではさすがに勧誘も止んでいる。やっと周囲が静かになったというのに今さら何の活動？ と二人が思うのも当然だったが、ルウはのんびりとデザートを楽しみながら言った。

「部活や同好会は同じ学校の生徒でするものでしょ。」

課外活動とはそこが一番大きな違いかな」

「学校の外でする活動？」

「アルバイトのことではありませんよね？」

「中学生にバイトはできないでしょ。——たとえば、

自動二輪があるよね」

「ケリーが乗ってた車みたいなやつか？」

顔なじみの海賊が乗りまわしていた巨大な機械の馬を思い出してリイは言い、ルウは頷いた。

「そう。簡単に区別すると車体の掃除を引き受けてお金をもらうのがバイト。自動二輪好きな人たちが集まって遠乗りに行ったりするのがサークル活動や同好会だね。それとは別に、運転技術の成績を競う大会や競技会に出場するのが目的でせつせと練習に励むのが部活動かな。——で、自動二輪の乗り方を無償で教えるのが課外活動なんだ」

「ボランティアなのか？」

「まあ、一種のボランティアには違いないんだけど、条件が二つあってね。一つはなるべく学校外の人と

関わること、もう一つは継続して行うこと」

「継続して？」

「そう。だから一度だけ老人ホームに慰安に行ったことがあるっていうのは課外活動とは認められない。そっちは本当にボランティアだね」

シエラが尋ねた。

「では、定期的に老人ホームに慰安に行く人たちは課外活動ですか？」

「それもちょっと違う。活動の定義は『得意分野を活かして無償で他者に貢献すること』なんだよ」

ルウは手持ちの携帯端末を操作して、課外活動の例を見せてくれた。それ専用の巨大な掲示板があり、代表者が活動を書き込んでいる。

手品の得意な生徒たち（中学生から大学生まで）が集まって病院や施設に慰問に訪れている。介護や料理を勉強中の生徒たちは独り暮らしのお年寄りや持病を持つ人の自宅を訪れて家事を手伝い、農業を学ぶ生徒たちが公共施設の温室を借りて花や野菜を

育てているという報告が並んでいる。

単独で活動している人もいて、その場合は自分の持っている技能を人に教えるという形が多いようだ。「ダンス」「発声」「球技の上達」といった項目が目立っている。水準もさまざま、高校生や大学生は中級からかなり高度な技術までを教えると謳っているが、中学生の場合は「水泳の初歩教えます」「フルートの何番練習曲の吹き方教えます」と可愛らしい。

リイは言った。

「こういうところに習いに行くのは、やっぱり同じ中学生なのかな」

「そうとは限らない。年が若いから経験が浅いとは言えないからね」

ルウが示した「フルートの練習曲を教えます」の頁には主宰者の簡単な自己紹介が載っていた。

自分は十四歳だが、この楽器は十年の経験があること、自分が今習っている先生から勧められて吹き

方を教えようと思ったこと。ただし、できれば指の置き方も知らない初心者に来てほしいとある。

「どうして素人限定なんだ。十年も経験があるならもっと高度な授業もできるのに」

「そりゃあ教えるほうも中学生だからね。そんなに本腰を入れた授業はできないよ。ほくの感想だけでも習っている先生に勧められてっていうのもポイントだと思う。この子は教えるほうに向いているって、その先生は思ったんじゃないかな」

「習うほうのメリットは？」

「課外活動は無報酬なんだよ。そこで指の置き方と基本的な吹き方だけでも教えてもらえれば、もっと高度な教室に通いやすくなるじゃない」

教えるほうも大勢の人にこの楽器を好きになってもらいたいという意識があるから、無報酬で活動をしている。あくまで本人が『自分の意思で』『好きだから』やるのが課外活動であって強制ではない。

利用する側も同じことだ。

「どのくらいの水準レベルの技術や労力を提供できるのか、主宰者の実力や経歴を確かめるのは大事なことだよ。下手な人には誰も教わりに行かないでしょ」

「長くやってる人は信用できるわけか」

「一つの目安にはなるね。活動記録も載ってるから、それを見て判断するのもいいよ」

先程の手工品の慰問活動のグループは（嘘うそではない証拠に）今まで訪れた施設の人たちと一緒に撮った写真を掲載していた。

習い事の主宰者たちも、今まで何人に教えたのか、自分の技術ぎりょうほどの程度なのか、きちんと記している。シエラが何か閃ひらめいたように言った。

「この活動は大人もやっているんでしょうか」

「うん。特に大学近くの街では盛んみたいだよ」

「でしたら、先程わたしがお邪魔したお宅がまさにそれだと思います」

先週のことだが、シエラは手芸部の女の子たちに、「これ編める？」と問いかけられた。

彼女たちが見ていたのは教室に設置された端末で、『ティルダおばさんの編み物』という頁のトップにそのセーターの写真と編み図が載っていた。

一見すると白一色に見えるが、ほんのりと桜色に複雑な模様模様が編み込まれている。簡単そうに見えて、実はかなりの技巧ぎこうを要するもので、シエラは思わず眼を見張ってそのセーターに見入ったという。

「編み物はだいたい一目見ればどんなふうふうに編んだものかわかるんですが、あれだけは編み図を見てもわからなかつたんです」

「ほんとに？」

ルウも編み物の得意な人である。シエラの腕前もよく知っているので意外に思ったらしい。

「シエラが編み図を見てもわからないなんて珍しい。そんなに凝こったセーターだったの？」

「情けない話ですが、降参です。——写真をご覧になってみてください。ミセス・ラムの——ティルダおばさんの編み物の頁ページに載っています」

ルウは言われたとおり自分の携帯端末を操作して、驚きの声を上げた。

「嘘でしょ。この編み図でこの模様が出る？」

「そうなんですよ。継ぎ目がないのはわかりませんが、この模様の出し方がどうしてもわからなくて……」

「こりゃあ、ぼくも降参だ。すごいね」

手芸には疎いリイが疑問を投げた。

「編み図って編み物の設計図みたいなもんだらう。設計図があるのに形にできないのか？」

シエラがやんわりと言った。

「リイ。それは調理手順書があれば誰でも美味しい料理がつかれるかと言うようなものですよ」

ルウもこの意見に賛成した。

「楽譜も同じだよ。譜面さえあれば一流の演奏ができるかっていったらそんなことは絶対ない」

「簡単なものなら編み図を見る必要ありません。完成品を見れば編み方も手順もわかりますが……」

シエラは編み物に関して並以上の腕前だという

自負を持っている。その自分が『編めない』と降参せざるを得ない作品に出くわしたのだ。認めたくはなかったが、ちよっぴり悔しかったのも確かだった。それでも諦めず何とかがこれを形にできないかと唸っている、女子たちが言ってきた。

「この人、編み物教室を開いていて、この編み方を教えてくれるんだって」

「教室の場所は非公開で、生徒にならないと教えてもらえないの。あたしたちも申し込んだんだけど、全滅だったんだ」

「この掲示板、表示地域限定だからこの近所なのは間違いないのよ。シエラなら行けるんじゃないかな。——習ってみる気ある？」

「もちろんです」

是非とも教えを乞いに行かなくてはと意気込んで領いたものの『受講申し込みについて』という頁を見て、シエラは首を捻った。

月謝は不要と明記されていたからだ。

他にもいくつか変わった条件が記されていた。

この掲示板は一般の人にもよく見るのに、受講者は中学から大学までの学生に限らせてもらおうとあり、編み物の初心者には申し訳ないが断りと明記され、受講を希望される方は自作の編み物の写真を送ってもらいたい、その上で生徒になる人にはこちらから日時と場所を連絡するといふのである。

リイが眼を丸くした。

「ずいぶん徹底してるな。誰に教えるかは向こうが決めるってことか」

「その理由も説明してありました。ミセス・ラムは編み物歴五十五年を誇る方だそうです。同じ年代の編み物友達もいて、互いに自分の考案した編み方を教え合っている。初心者には不向きのかなり高度な技法を、文字通りいくつも『編み出した』そうです。ただ、自分たちも年が年なので何かあった時にその編み方を次に伝えてくれる若い人がいない。そこでこの編み方に興味を持って習いたいと思う若い人が

いるなら、ぜひ教えておきたいというんです」

ルウが納得して頷いた。

「なかなか厳しい条件だね。若い上に相当編み物が上手でないといけない」

「それで手芸部の女の子たちは全滅したわけか」

「彼女たちも決して下手ではありません。ミセス・ラムの求める水準がかなり高かっただけです。幸いわたしの作品はお眼鏡かまに適ったようですけど」

シエラは寮に戻って自分の編み物の写真を撮り、寮の外線でティルダおばさんに送信した。

部屋の端末から送ったのでは不特定多数の生徒に返事を見られてしまうからだ。

はたして翌日には寮のシエラ宛に、編み物教室の住所と日時を示した返事が送られてきた。

確かに近所だった。歩いても三十分とかならない閑静な住宅街である。

指定された日時は今日の午前だった。

シエラはちよつぱり身構えてマティルダ・ラムの

自宅を訪れた。その家は庭付きの一戸建てで、塀は達者ではあるが明らかに素人の手で塗ってある。

庭に植えられた草花もよく手入れされている。

住まいにはなるべく自分で手を入れて住み心地をよくしようという心意気が窺える佇まいだ。

職人肌の気むずかしい老婦人を想像していたが、意外にもマティルダ・ラムは福々しい顔に薔薇色の頬をした可愛らしい人だった。

彼女にとつてもシエラの姿は予想外だったようで、出迎えた玄関先で呆気にとられて眼を丸くしていた。

「まあ……、驚いた。こんなにきれいなお嬢さんが来てくれるなんて……」

「すみません。ミセス・ラム。わたしは男です」
人のよさそうな老婦人はますます眼を丸くした。

シエラはせめてもの授業料代わりに、寮の台所をつくった果物のタルトを持っていった。

かなり大きめにつくったのは編み物教室の生徒が大勢いると思ったからだ、彼女は独り暮らしで、

生徒もシエラ一人しかないという。

それは却って迷惑になってしまったと恐縮したが、ミセス・ラムはこの手みやげをととても喜んでくれた。「嬉しいわ。甘いものは大好きなのよ。後で一緒にいただきますしよ。残りはご近所にお裾分けすれば、無駄にはなりませんよ」

ミセス・ラムの作業部屋はお手製の作品に溢れた、こぢんまりとした気持ちのいい部屋だった。

「こんなお婆さんのところに習いに来てくれるのにうるさいことを言っでごめんさいね。大勢の人に教えるのはどうも苦手で……緊張してしまつて」

ミセス・ラムは夫に先立たれた後、子どもたちも独立して、今は遠く離れた孫たちにいるいろ編んでやるのが楽しみだそうだった。

こういう『祖母の善意』は孫にはありがた迷惑な場合も多いが（お世辞にも上手とは言えなかったり、趣味が合わなかったりするのだ）、ミセス・ラムに限ってはその心配はなさそうだった。室内の随所に

飾られた作品は人がお金を出してでも欲しがりそうな見事なものばかりである。

シエラが持参の毛糸を見せると、ミセス・ラムは『趣味がいいこと』と喜んで褒めてくれて、自分の指示をすぐに呑み込んで着実に手を動かすシエラを満足そうに見つめていた。

一通りの授業を終えた後は二人でお茶にしたが、ミセス・ラムはシエラお手製のタルトを味わって、お世辞抜きに感心したらしい。

「美味しい。シエラはお料理も得意なのね」

本当の祖母に褒められたようでシエラも嬉しくて、笑顔を返した。

「よかった。お口に合って」

「こんな美味しいタルトはお店でも買えませんよ。

これ、今度孫が来た時に食べさせてやりたいから、つくり方を教えてもらえないかしら」

もちろん快く承諾したシエラだった。

こんなふう二人は初対面ですっかり意気投合し、

シエラは来週も行く約束をしてきたという。

話を聞いたルウは頷いた。

「そう、ティルダおばさんのそれが課外活動だよ。お金儲けが目的じゃないから、誰に何を教えるのか、どんな労力を提供するかは主宰者側が決めるんだ。

——最初に出会ったのがいい人でよかったね」

「はい。ミセス・ラムも楽しそうでした。わたしも学校外の人と、特に年配の方と関わることは今までなかったのが新鮮な体験でした。あの人は編み物に關してはわたしなど足下にも及ばない達人ですから、大いに勉強させてもらいたいと思います」

リイが笑って言った。

「何となく課外活動の意義がわかった気がするよ。

ルーファは何かやつてるのか？」

「今のところ何も。——だからさ、いい機会だから何か一緒にできないかなと思って」

それはいい考えだとリイもシエラも思ったものの、

二人は戸惑った顔を見合わせた。

「ですけど、問題は……」

ルウが苦笑しながら頷いた。

「そう、何をやるかなんだよね。——ほくも料理や裁縫さいほうは下手じゃないと思うけど」

下手ではないとは謙遜けんそんにも程があると知っているシエラが小さく吹き出した。

「ご冗談を——。わたしが人様に教えられることがあるとすれば、やはり料理や手芸が主ですが……」

「シエラはそれでいいとして、おれはどうする？」

「武術や護身術を教えるのはまずいですよね」

リイが答えるより先にルウが真顔で否定した。

「だめだよ。まずいなんてもんじゃない」

「大工仕事と力仕事なら割と得意なんだけどな」

「ですけど、それに料理と手芸を足すのはちよつと趣旨しゅしがばらばらな感じですね」

うまい案を思いつかずに、リイとシエラは真顔で考え込んだ。

「……意外におれたちで何かやるのって難しいな」

「ですね。困りました」

「もともとおれは戦う以外は能がないからなあ」

「とんでもないことをおっしゃる。それを言うならわたしのほうこそ、家事仕事と——口にはできないあの稼業せうぎょう以外は何の能もありません」

「そんなことはない。シエラはどこへ行っても何をしても立派りっぱに役に立ってるじゃないか。おれはなあ……腕うでっ節せつ以外は本当に役立たずだからな」

十四歳の少年二人が真剣に唸うなっている。

どちらも本気で言っているから恐い。

この二人を『役立たず』とは件の海賊かいぞくが聞いたら腹を抱えて大笑おほはらいするに違ちがいない。彼の妻つまもだ。

黒い天使も懸命けんめいに苦笑くせうを噛かみ殺ころしながら言った。

「まあ、別に今すぐ決めなくてもいいことだから。ちよつと考えることにしようよ。——二人とも今日はこの後も別行動？」

「おれは寮長と約束してる。正しくは元寮長だな」

ハンス・スタンセンはシンクレア大学の一年生だ。

彼は前期末にアルサチアン高校を卒業し、それに伴い六年間暮らしたフォンダム寮も『卒業』した。

フォンダム寮は中・高校生のための寮だからだ。

卒業したハンスは今シンクレア大学の寮の一つで暮らしているが、卒業しても元の寮とのつながりが切れるわけではない。

特にハンスはこの後輩とは在寮時代に何かと縁があつたので、今でもたまに連絡してくるのだ。

「ロッドの大学対抗戦が近くて、代表入りしたから、少し特訓につきあつてほしいんだって」

ルウが感心したように言った。

「すごいね。シンクレアはロッドの強豪校なのに、一年生で代表選手に選ばれたんだ」

アクション・ロッドは広く普及している棒術だ。

代表選手の練習につきあうとなると、ある程度は実力の片鱗へんりんを見せなくては話にならない。

「武術を教えるのはまずいという先程の発言と矛盾むじするが、ありがたいことにハンスは口が堅い。」

リイの実力を——大学代表選手に選ばれるほどの自分が五つも年下の中学生にこてんぱんに打ち負かされてしまう現実を誰にも言わないでいられる人だ。みつともなくて話せないのかもしれないが、誰に話しても信じてもらえないと判断するだけの分別を持つているということだ。高校を卒業したばかりの若者にしては稀有けうな人である。だからこそ、リイもハンスの頼みには素直に応じている。

「わたしは手芸部の女子と会う約束です。ミセス・ラムの編み方をさっそく知りたいというので」

ルウが訊いた。

「ティルダおばさんは自分の考案した編み方を他の人に教えてもいいって言ったの？」

「はい。もちろんご本人の了解をいただいています。ミセス・ラムはむしろ、そうしてくれれば助かると言っていました。ご自分の技術を人に教えたくないわけではなく、見知らぬ生徒を大勢相手にするのは疲れるという理由で生徒を選別したようですから」

「それだけじゃないでしょ。どうせなら教え甲斐のある人に教えたかったんだと思うよ」

リイが何か思い出したような顔になった。

「シエラ、その教えるのって長くかかるか?」

「まだ基本だけですからそんなには。なぜです?」

「悪い。言い忘れてた。元寮長が後で寮に寄るから、その時はいてほしいんだって」

「わたしに何かご用でしょうか」

「おれたちにらしい。元寮長の団体が来るそうだ」

先週、リイはハンスと今日の特訓の約束をしたが、その時に言われたのだ。

「午後にはフォンダム寮で寮長の会合があるんだ。

元寮長が五人来るから、きみたちもいてくれ」

生活の場を共にした分、寮生たちの結束は強い。

特に歴代の寮長を務めた生徒たちは卒業した後も時折古巣に集まっては寮の現況を把握している。

なぜそういうことをするかと言えば、新入生には去年までの寮長が誰だかわからない。最悪の場合、

訪れた先輩を不審人物と勘違いする羽目になる。

そんな事態を避けるために元寮長は定期的に寮に集まって会合を開いているとハンスに聞かされて、

リイはきよとんとなった。

「去年そんなのあったっけ?」

「あったんだ。——三回も。ただ、そのどの時にもきみとシエラは寮を留守にしていたんだ」

真顔で言われて、思わず首をすくめたリイだった。

「おかげで五人とも、今度こそ噂の金銀天使の顔を見ない限りは帰れないと言ってる。——ほくの顔をつぶさないでくれよ」

「おれもシエラも見せ物じゃないんだけどなあ」

「一見の価値があるのは確かだろう」

からかうように言い返されてリイは苦笑した。

天使のようだと賞賛される己の容貌にはまったく興味がないリイだったが、耳にたこができるくらい聞かされているのも事実なので、見る人がこの顔に並々ならぬ興味を持つことだけは理解している。

「だけど、元寮長って五人しかいないのか？」

「馬鹿言っちゃいけない。フォンダム寮は五十年の歴史がある寮だぞ。——それより年長の人はみんな社会人なんだよ」

社会人になると、連邦大学惑星を離れる人も多く、日程の関係もあるので、あらためて同窓会を設けて集まるのが通例だそうだ。

「——で、その元寮長ばかりが集まる会合が今日の四時からなんだと」

「わかりました。時間までには戻ります」

立ち上がるうとした時、リイはさっきの白い髪の毛の人が食堂の端に立っているのに気がついた。

こちらを見ていたようだった。

ルウがリイの視線につられてその人を見る。すると、その人は先程の合掌ではなく、右拳を

左胸の前に持って来る姿勢で静かに頭を下げた。

この変わった礼に、ルウも会釈を返したので、リイは問いかけた。

「知ってる人？」

「ううん、知らない人。一度も話したことはないし、名前も知らないんだけど、なんでかな。この頃よく眼が合うんだよね」

シエラもその人の一風変わった身なりには興味をそそれたらしく、控えめに尋ねた。

「サフノスクの方ですか？」

「違うと思う。平日は見えないから」

三人とはまた別の意味で恐ろしく目立つ人だ。

あんな異風体の人がキャンパスを歩いていたら、気がつかないわけがない。

サフノスク大学は土日に限って構内を一般人にも開放しているから外部の人だろうとルウは言った。

「学食を使えるのは他校生も含めて大学の学生証を持つている人だけだから、他の大学の人だろうね」

リイとシエラはサフノスク生のルウと一緒になので、学食を使っても問題はないのである。

三人がそんな話をしてるうちに、いつの間にか

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。